

学習転移の基礎となる専門家の対象理解について—看護専門教育を例として

教育デザインコース 心理学領域

川名 るり，有元 典文

1. はじめに

学習の転移とは、「ある状況で獲得した知識が後の状況での問題解決や学習につながる現象」（白水，2012）を指す。看護学教育ではこのような既習の専門知識・技術を新しい具体的状況に持ち運び活用することが本質的に期待されている。

しかし、実際の臨床現場では看護学教育で期待される学習の転移可能性とのギャップが様々に報告され、それが問題視されている。今回の研究は看護における学習転移への期待（「〇〇科で働いていたのだからここでもいけるだろう」と実情の間に潜在する課題を探求する上での予備的調査に位置づく。本研究の目的は看護師が学習転移の基礎としてどのような看護対象（患者）理解をしているのかを明らかにすることであり、看護学における学習転移の議論を深める一助とする。

2. 方法

調査対象はN看護師育成講座（201X年）の小児看護学講義を受講したベテラン看護師37名であった。講義開始前に無記名の質問紙調査を実施し、「小児看護実践に対するイメージと思い」について自由記述で回答を得た。分析は大谷（2011）の手順を参考にし、イメージ形成の根底にある理解の仕方を分析して、導き出された概念をストーリーとして記述した。倫理的配慮として、自由意思の保証、個人情報保護等を説明し、調査用紙の回収をもって承諾が得られたものとした。

3. 結果

分析対象は承諾の得られた25名（回収率67.6%）のうち小児病棟での臨床経験のない看護師21名のデータとした。平均年齢は34歳（ $SD=7.87$ ）、平均臨床経験年数は18.5年（ $SD=7.61$ ）であった。セグメント化したテキストデータは67であった。以下、【 】は概念を示した。

全てのデータから、子ども、親、家族に対する記述と、親、家族と子を一对と捉え、家族ぐるみで看護の対象とみている記述が得られた。

イメージ形成の根底にある理解の仕方は次のような関係で記述された。ベテラン看護師の小児看護実践に対するイメージは【感情に深層する包括的理解】、すなわち、病気を持つ子どもと家族の置かれる状況を多面的に捉えようと接近し、包括的に理解していることから想起されていると考えられた。包括的な対象理解によって、子どもを擁護される存在として理解し、【擁護する実践者としての役割意識】を持ってイメージ化する看護師がいる一方で、【自分の実践としてのリスク】としてイメージ化されることが明らかになった。

4. 考察

結果より、ベテラン看護師は専門領域に特化されない一般的な包括的理解のスキルを備え、それが転移の基礎となっている可能性が示唆された。

この包括的理解のスキルがベテラン看護師にとって患者を理解する際の一定の様式であるという可能性を踏まえると、配置転換に伴う看護師の転移不能性は、表層の専門領域の差異を自他が過大にピックアップしているだけに過ぎないのではないか、つまり、うまく転移できていないという自他の評価によって前景化する社会的な可視化の結果ではないかという仮説が新たに浮かび上がる。今後、学習転移の起きる臨床現場で事例を収集するアプローチを継続し、仮説の精緻化を図ることが次なる課題である。

【文献】

大谷尚（2011）. SCAT : Step for Coding and Theorization. 感性工学, 10(3), 155-160.
白水始（2012）. 認知科学と学習科学における知識の転移. 人工知能学会誌, 27(4), 347-358.